

## 審査講評 第15回 日本水大賞委員会 審査部会長 虫明功臣

日本水大賞は、今回第15回を迎えました。審査部会長として、「日本水大賞」への応募状況ならびに審査・選考の経過についてご報告申し上げます。審査部会は、日本水大賞委員会のもとに各賞の候補を選考するために設けられており、水防災・水資源・水環境・水文化等の分野の専門家や学識経験者17名で構成されています。審査は、「日本水大賞」募集要項に記された「対象の範囲」および「審査基準」を基に進められました。各賞の候補となった活動は、日本水大賞委員会に報告され、審議の結果、「大賞(グランプリ)」をはじめとする日本水大賞の各賞が決定されました。

### 応募状況

15年間を振り返って見ますと、総数2851件の応募があり、そのうち199件が受賞しています。応募が多いのは、東京都の263件、神奈川県163件、大阪府124件、千葉県と愛知県の101件、北海道100件、少ないのは、奈良県と鳥取県と徳島県の19件、佐賀県の20件となっています。

本年は山梨県、鳥取県、高知県を除く全国の都道府県から総数185件の応募がありました。応募活動を主体別に見ますと、団体が52%、個人が15%、学校が23%、企業が4%、行政が2%となっており、今回はすべての主体から応募がありました。活動分野別では、水環境44%、水文化20%、水資源20%、水防災10%、今年から新設した復興支援分野が6%となっています。

審査結果：各賞の受賞者と活動名称および審査講評を以下に示します。

### ○大賞<グランプリ>：宮城県 マイファーム亙理協同組合

「津波により水利が崩壊している地域での農作物栽培」

イチゴ栽培で東北一の出荷を誇っていた亙理町沿岸部の農業地帯では、東日本大地震津波によって農業水利施設やイチゴハウスは全壊、農地はすぐには回復が困難と言われる塩害を受けました。こうした事態の中でこのグループは、震災直後から次世代へつなげる農業再興への確固たる意志をもって除塩作業を進め、一年後2012年3月には農事組合法人を設立して夏には塩分に強いトマトの栽培を、秋冬にはダイコンとハクサイの栽培を成功させています。塩害土壌の改良への工夫や水利施設が機能しない中で農地の保水と排水の工夫のもとに可能となった農作物の栽培、そして消費者と直結することを意図した加工品トマトジュースの生産など、新しい形の農業再興モデルに挑戦されていることに感銘を覚えます。

被災地農業者が主導する農業再興のトップランナーとしての逞しい取り組みに敬意を表し、応援したいと思えます。

### ○国土交通大臣賞：福岡県 遠賀川流域住民の会

「遠賀川の再生を目指して ～森・川・海の連携～」

この会は、流域共同体意識を育みながら各地域の特性を生かした川づくり・まちづくりを進めることを目指して、遠賀川流域で河川環境改善や文化・歴史保全活動に取り組んでいる約80団体と情報を共有することにより連携を強化する一方、行政や住民、企業に連携の輪を広げて多彩な活動を展開しています。具体的には、総勢2万人参加の遠賀川一斉清掃、団体間の活動や体験の交流会、海岸クリーンキャンペーン、源流の森再生のための竹林間伐と竹炭による水質浄化、カヌー駅伝大会、情報誌の発行など長年の活動実績の上に、平成24年には、県知事と流域全自治体の首長22名が出席する【遠賀川流域リーダーサミット】を開催し、「遠賀川を共有の貴重な財産として守り、次の世代へ引き継ぐこと」などの【遠賀川流域宣言】が出されました。

長年にわたる流域全体での広範な活動を通して、多くの活動団体や企業と行政とが連携・協働できる場づくりをし、生き生きとした流域づくりに貢献していることは大変高く評価されます。

## ○環境大臣賞：福井県 大野市

「水と共に生きる大野市の活動 ～井戸枯れから始まった地下水保全に対する取り組み～」

古くから豊富な地下水と湧水とともに生きてきた大野市は、1970年代から80年代にかけて地下水位の低下による井戸枯れと湧水量の減少や枯渇を経験しました。以来、地下水位／水質観測の継続、地下水保全条例の制定、地下水保全基金の設立、地下水保全管理計画の策定、森・水保全条例の制定など、先進的な地下水保全施策を進める一方で、「名水百選」や「水の郷百選」の選定にふさわしい湧水文化の再興や名水を活かしたまちづくり計画など、地域づくり／地域おこしに結び付けた取り組みを展開しています。

市民を巻き込んだ地下水保全と湧水文化を活かした「名水のまち大野」のまちづくりへの取り組み、大野市の35年以上の長きにわたる系統的かつ継続的なこの取り組みを称賛し、高く評価します。

## ○厚生労働大臣賞：東京都 東京都水道局 多摩川水源森林隊

「多摩川水源森林隊による民有林の再生」

多摩川水源流域(羽村取水所上流域)の約4割は、東京都水道局が保全管理する水源林ですが、他6割の民有林では、林業不振等により間伐などの手入れが行われず、土砂流出の増大や山地災害の発生に繋がる荒廃が進んだ人工林が多い。多摩川水源森林隊(東京都水道局職員隊長、関連会社職員事務補佐、東京都森林組合職員現地指導、登録ボランティア隊員で構成)は、ボランティア活動によって荒廃が進む民間人工林を健全な森林に再生させることを目指して10年前に設立。これまでに、897名のボランティアが登録、通算1,200回以上の活動、延べ人数14,075名で158haの民有林で再生活動の実績を挙げています。毎週3回の活動、毎回受け入れ数以上のボランティア隊員からの応募があるなど、順調に活発な運営がなされています。

ボランティア参加を啓発するユニークな水源林保全の取り組みを高く評価するとともに、ボランティア隊員の水源林再生への貢献を讃えます。

## ○農林水産大臣賞：兵庫県 いなみ野ため池ミュージアム運営協議会

「いなみ野ため池ミュージアム」

東播磨地域で約600を数えるため池群とそれらを繋げる水路網は、農業用水の供給だけでなく、水害から町を守る安全装置として、また、多様な生物の棲息空間を提供するなど多面的機能を発揮しながら、この地域を特徴づける風景を形作り、地域の財産となっています。いなみ野ため池ミュージアム運営協議会は、都市化の進展の中で維持・管理が困難になったこの地域の財産を保全・活用して次代へ継承するために、様々な取り組みを行っています。具体的には、ため池管理者、市町、地元メディア、JA、調査・研究団体、環境団体等、関係者が連携・協働できる体制づくりのうえに、清掃や池干しなどの保全活動、生態系調査や環境学習、ため池関連神祭事の継承、四季折々の催事、出前講座やフィールドワーク、ため池博覧会、さらには、捕獲外来生物の肥料化、伐採竹の粉末化による土壌改良材や消臭剤の製造、里海連携などすべてを「ため池ミュージアム活動」と位置づけて、ため池と水路そしてその保全への関心を高め、ため池文化の保全・再興に成果を上げています。

地域住民が力を合わせて、地域資産「ため池群と水路網」を中心とした新たなコミュニティづくりに成果を上げているのは、素晴らしいことです。高く評価し、今後の更なる発展を期待します。

## ○文部科学大臣賞：広島県 盈進中学高等学校 環境科学研究部

「芦田川水系における環境保全活動 ～絶滅危惧種スイゲンゼニタナゴ保護を中心に～」

スイゲンゼニタナゴは、芦田川水系と高梁川水系小田川でしか生息が確認されていない絶滅危惧種です。26年前、福山市域の水路改修工事に際して救出活動をしたのをきっかけとして、生息域の分布調査、人工繁殖の試行と成功など、生息環境と保護に関する研究を開始。その後、福山市環境保全課、国交省福山河川国道事務所等の行政機関や専門学識者と交流・連携を強めながら、スイゲンゼニタナゴの生息域の保全を中心とする研究をさらに前進させる一方、多様な広報・啓蒙活動を通じて「芦田川は“汚れた川”ではなく、希少なゼニタナゴの住む“豊かで貴重な川”」という市民の意識改革を進め、ゼニタナゴを守る市民会議の立ち上げに尽力するなど、環境保全の実

実践活動にも成果を上げています。

スイゲンゼニタナゴの生息環境と保護に関するレベルの高い調査・研究と、その成果に根差した、地域を巻き込んだ環境保全の実践活動は、大変高く評価されます。この受賞によって、この取り組みが次の新たな展開へのステップになることを祈念します。

#### ○経済産業大臣賞：大阪府 シャープ株式会社

「環境及び生物多様性の保全・啓発活動を通じた水循環の健全化」

同社は、労使共同で運営するボランティア団体を活動主体として、この10年間、北海道から沖縄に至る全国各地で地域の特性を生かした環境保全活動と水環境教育・啓発活動を展開しています。その目的は、社員の地域社会への貢献や環境保全に対するマインドの高揚と、次世代を担う子供達の環境意識の向上としています。具体的には、環境保全活動として、全国12ヶ所で累計約280回、延べ約15,000人参加の植樹・育林活動「シャープの森づくり」、9か所で延べ約130回、約4,000人参加の「河川と海岸でのクリーン&グリーン活動」、10か所で延べ約48回、約1,500人参加の「ラムサール条約湿地での生物多様性保全活動」など、教育・啓発活動としては、小学校を対象に地球温暖化や生物多様性などを内容とし環境保全や水防災意識の啓発を意図した実践的授業(延べ2,842校、受講168,272名)を行っています。

水循環健全化を視点とし、地域に根差して息の長いこの企業の社会貢献活動を高く評価し、今後の更なる発展を期待します。

#### ○市民活動賞：京都府 鴨川を美しくする会

「鴨川納涼・鴨川茶店等の多彩な河川活用活動」

この会は、友禅染めの工業排水やゴミの不法投棄などで汚染・荒廃した鴨川を美しい川に再生させることを目的として1964年に結成されました。以来、熱心に清掃活動を継続するとともに、友禅染に対しては汚水処理装置の設置を求めるなど、行政や他の多くの団体と連携して鴨川の美化運動の輪を広げてきました。いっぽう、河川の美化を啓発する活動として、1969年からは8月に河川敷での「鴨川納涼」を、1973年からは4月の花見観光シーズンに「鴨川茶店」を毎年開催、いずれも今や多くの市民や観光客を集める国際文化観光都市・京都の風物詩となっています。また、流域内の多数の小中学校で鴨川の水環境と美化活動に関する授業を行うなど、河川環境学習においても教科書に紹介され、各地から教諭が研修に訪れるほどの成果を挙げています。

これまで48年間の長年にわたり美しい鴨川の再生に尽力し、古都・京都の鴨川に新しい文化を構築されていることに称賛の意と敬意を表します。

#### ○国際貢献賞：千葉県 上総掘りをつたえる会

「命の水のパイプライン～湧水から学校へ～」

この会は1981年の設立以来、我が国の伝統的な井戸掘り技術である上総掘りを継承し、これをフィリピンなどの東南アジア途上国に適用・移転しながら多くの井戸建設を実施することによって、安全で安定した水の供給に尽力してきました。今回対象としたフィリピン・セブ島のアレグリア市では、12の小学校の半分には水道がなく、子供たちが1~2km離れた水源へ水汲みに行くのが日課であり、手洗いやトイレの水洗の水が不足して、不衛生な環境下にありました。この地域は岩盤で出来ているために上総掘りの適用は不可能なので、会からの派遣メンバーが地元メンバーの協力を得て、水汲みの源となっている湧水からパイプを敷設し貯留タンクを備えた、手作りの簡易水道を市内の2つの小学校で完成させました。これによって、子供達は水汲み作業から解放され、飲料水やトイレ水洗面水等の確保により学校の衛生環境が向上したことに、市長や教育省から感謝状が贈られています。

この会が継続・発展させている、貧困地域での安全な水供給を中心とした草の根の国際貢献を賞賛します。

### ○未来開拓賞：長野県 地域づくり工房

「くるくるエコプロジェクト ～ミニ水力発電を通じた個性ある地域づくり～」

長野県大町市の北アルプス山麓の複合扇状地では、先人が開発した延べ220kmに及ぶ農業用水路網があります。「地域の資源を活かした、市民による地域おこし」を理念とするこのグループは10年前から、ミニ水力発電の技術面／制度面の課題を検証するために、この用水路網にタイプの異なるミニ水力発電所を設置して、失敗から得られる教訓も含めた実践的成果を書籍の出版、学会での論文発表、講演などを通じて全国に発信し、「ミニ水力発電の伝道師」と言われるまでになっています。また、地域の観光振興を兼ねた環境学習とエコツアーを実施するとともに、地域の水資源開発の歴史を掘り起こし伝える活動も行っています。

ミニ水力開発の導入に関するこれまでの先駆的実践活動を讃えるとともに、今後の活動の更なる発展を大いに期待しています。

### ○未来開拓賞：山口県 高川学園中学・高等学校 科学部

「中山間域の活性化につながるオオサンショウウオの保護活動」

科学部員が2007年に錦川上流で県内初めてオオサンショウウオの生息個体群を発見して以来、2009年からは捕獲した成体にマイクロチップを埋め込んで追跡調査を続けています。この調査は、夜行性の生き物のために夜間の川辺や川の中の危険な踏査が必要であり、調査機器をともなった4～6人の部員が共同作業で行う大変な作業です。地道な調査研究によって、これまでほとんど知られていなかったオオサンショウウオの生息動向と生息環境の実態そして保全・保護の必要性を明らかにし、その成果は2011年の日本ストックホルム青少年水大賞で優秀賞を獲得しました。これを契機に「錦川オオサンショウウオの会」の設立や「日本オオサンショウウオの会」の全国大会の岩国市錦町への誘致が実現し、地元でこれまで無関心であった絶滅危惧種指定のこの特別天然記念物への関心を高め、行政や教育委員会も乗り出した保護活動が始まりつつあります。

地域の意識を変えた科学部高校生がこの環境保全・保護活動を称賛し、彼らの思いのようにこれが「地域の誇り」や「地域の活性化」に発展することを期待しています。

### ○未来開拓賞：佐賀県 佐賀市上下水道局下水浄化センター

「地域に密着した資源循環型下水処理の実現」

佐賀市では、下水処理の過程で発生する処理水や汚泥やガスを地域資源と捉えて、地域の漁業者、農業者、市民のニーズに応じた資源循環型の利活用に取り組んでいます。具体的には、富栄養化して周辺海域に影響を与えないようモニタリングを実施しながら、海苔の成長に合わせて処理水の窒素濃度を調整して放流し栄養分を与え、良質の海苔養殖に貢献する一方、センターに貯留されている処理水は、様々な農業用途、すなわち、野菜への活性液肥、稲、麦、大豆の消毒用水、牛舎の脱臭洗浄用水、スポンジの養殖用水などとして、農家がいつでも取水し、運搬・利用できるようになってきました。また、下水汚泥は、農家に受け入れられやすい堆肥化に成功し、好評のうちに極めて安価で販売。処理過程で発生するメタンガスを使ったガス発電によって、年間4,000万円の経費削減に繋がっています。

「地域のニーズに応え、地域で喜ばれる」をモットーとするこの先駆的な資源循環型下水処理への取り組みを高く評価し、他地域への波及を期待します。

### ○審査部会特別賞：岐阜県 岐阜県立岐山高等学校 生物部

「カワニナを通して考える地域の生態系～ひとつふたつなどほのかにうちひかりて行くもをかし～」

岐阜市では、ゲンジボタルの餌として10年前から多くの地点で琵琶湖産カワニナが放流されていました。これは、愛好家の間ではホテルを増やし維持するためには必要と考えられ、放流が一部の小学校や幼稚園の間では環境教育の一環として行われていました。それに懸念を感じた同校生物部の生徒は、琵琶湖産と地元産のカワニナの聞き取りと生息分布の現地調査、両者の流れならびに低温に対する耐性の違いに関する実験研究、遺伝子調査など、科学的調査研究の上で、この放流が地域の生態系に悪影響を及ぼすと結論。放流団体にこの研究成果を理解

してもらうための努力を重ねて上で、今後の放流中止に漕ぎ着けました。また、小学生へ出張授業により、中止の理由と地域生態系を守る意義について理解を深めるための活動を行っています。

高校生がしっかりと調査研究の上で、地域の社会通念を覆して琵琶湖産カワニナの放流中止を達成した、勇気ある粘り強い取り組みを称賛します。

#### ○審査部会特別賞：兵庫県 佐用町久崎自治会

後世に体験を語り継ぐ災害記録誌の編纂「あの日あの時 ～平成21年8月9日の記憶～」

佐用町は、平成16年に100年に一度と言われる水害で死者26名を出す大きな被害を被りましたが、5年後の平成21年8月9日の台風9号の豪雨によって、同町久崎地区では最大水深約3m、171個の8割が全・半壊する、明治以来最大規模の水害を受けました。先の水害から立ち直ったばかりのところ、住民の方々は絶望感、無力感、疲労感そして将来への不安感に打ちのめされていました。この大水害では、5年前の経験もあってか、この地区では奇跡的に死者を出しませんでした。復興が進む中で、この貴重な被災体験の記憶が風化しないうちに記録に残そうという機運が高まり、被災から約2年経過した頃から有志により、被災した人の九死に一生を得た体験、小学生の作文、災害時の写真を収録した記録誌の編纂が始まりました。

災害体験とその教訓を伝承することは、地域の防災力を向上させるための基本のひとつです。多くの被災地でこれが課題となっている中で、この地区の自発的な水害体験伝承への取り組みは全国的な見本として高く評価されます。

#### ○審査部会特別賞：島根県 飯梨川再生ネット

「河川敷牧草栽培による飯梨川の環境保全と親水活動推進」

島根県安来市の市街地を流れる飯梨川の高水敷は、竹や雑木、雑草が繁茂して、タイヤ、洗濯機などの大型廃棄物が不法投棄されるゴミ捨て場になっていました。このNPO法人は、これを川の本来的な姿である「空に開けた河川空間」に再生することを目指して、河川管理者と協議、「河川管理者が住民の手に負えない竹や木の伐採除去を行い、その後の維持管理は住民が受け持つ」という基本合意を成立させ、この方式によってまず、河川敷・堤防3000㎡を“河川敷イベント広場”に整備することに成功した後、畜産農家などの協力も得ながら、環境に悪影響が出ないような入念な施肥管理を工夫しながら20haで牧草栽培を進めています。また、保育所・学校の学習活動、サッカー練習場、親子連れの水遊び、花火など広く活用されている、2haの“親水ひろば”を整備しています。この事業が住民から大変好評であることが、アンケート調査で示されています。

住民が主体となって経済的にも自立した管理を目指すユニークな、民と官の協働事業として高く評価されます。

## 審査講評 2013 日本ストックホルム青少年水大賞 審査部会長 千賀裕太郎

### 賞の概要と応募状況：

「日本ストックホルム青少年水大賞」は、20歳以下の高校・高等専門学校生徒または生徒の団体による水環境に関する調査研究活動および調査研究にもとづいた実践的活動を表彰するもので、その受賞者は毎年夏にストックホルムで開催される国際コンテスト「ストックホルム青少年水大賞 (SJWP)」に日本代表として参加することになります。

昨年の日本代表である青森県立名久井農業高等学校 TEAM FLORA PHOTONICSは、「大震災を乗り越えて～海岸のシンボル『サクラソウ』の保護と塩害花壇の再生活動～」と題して27ヶ国からの代表に混じって堂々と研究成果を発表し、審査員の強い関心を引きましたが、惜しくも受賞を逃しました。

本年は全国より15校、17団体（北海道1団体、東北3団体、関東5団体、中部2団体、近畿3団体、中国3団体）から応募がありました。いずれも身近な水環境を対象にした力作ぞろいの高校生らしい自主研究でした。

### 審査経緯

審査は、5人の審査委員からなる審査部会において、ストックホルム青少年水大賞世界大会の審査基準に従って、厳正に行われました。この審査基準は、妥当性（水環境がかかえる重要な問題に的確に取り組んでいるか）、創造性（問題提起や問題解決の方法、実験・調査やデータ解析の方法に創造性が見られるか）、方法論（明確な問題意識のもと作業計画が適切であるか）、テーマに関する知識（既往研究のレビュー、参考文献、情報源、用語の理解等が十分か）の4項目からなります。

審査は2段階で行われました。まず審査委員がそれぞれ行った書面審査の結果を持ちよって審議して、上位4チームを選びました。次にこの4チームから、英語による要旨発表及びパワーポイントを用いたプレゼンテーションを聴取したうえで質疑を行い、慎重な協議を経て「日本ストックホルム青少年水大賞」及び「審査部会特別賞」の授賞団体をそれぞれ選定いたしました。

### 審査結果と授賞理由

「2013年日本ストックホルム青少年水大賞」に輝いたのは、「瀬戸内海の海底ごみ問題の解決に向けての取り組み～回収活動と啓発活動からのアプローチ～」と題する調査研究を行った、山陽女子高等学校地歴部（代表：山口結愛、井上歩美、築地志歩、指導教諭：井上貴司）です。

海底環境に深刻な影響を及ぼす海底ゴミは、目視できないこともあって、その認知度は一般に高くありません。本研究グループは、本問題で漁獲量の減少という直接的被害を受けている漁業協同組合の協力を得て、瀬戸内海において5ヵ年にわたり漁船を用いた海底ごみの回収活動をおこなって海底環境の浄化に貢献するとともに、その実態解明に向けた調査研究を行いました。この結果、瀬戸内海という閉鎖性の海域では、陸地から河川等を通じたゴミの流入が多く、ビニール、プラスチック、アルミ缶、ペットボトル、スチール缶等の生活ゴミが大部分を占めていることを明らかにしました。さらにこの調査研究結果を、メディアや学術集会、国際会議等で報告するなど、啓発活動を積極的に行い、海底ごみ問題への市民の認知度を著しく向上させるなど、本問題の解決に重要な貢献を行っています。以上の理由から、本研究グループに日本ストックホルム青少年水大賞を授与することとしました。

また、審査部会特別賞に輝いたのは、「日本一暑い町・多治見を冷やす2つの機構 川と山」と題する調査研究を行った、岐阜県立多治見北高等学校自然科学部（代表：土井淳平、塚本悠喜、柴田大輝、指導教諭：田中誠二）です。

近年、日本での観測史上最高気温を記録している“酷暑のまち”多治見市において、地形及び土地利用と気象との関係性を解明する調査研究を行った結果、盆地外縁部の緑地と市内を横断する河川が、都市を冷却

する機能を有している可能性が示唆されました。本調査研究は、局地気象研究に貢献するとともに、地域計画手法における森林及び河川・水路の機能・意味論に新たな知見を提供する可能性が認められることなどから、更なる調査研究の発展への期待を込めて、審査部会特別賞を授与することとしました。

---